

REVIEWS

連帯のオントロギーとしての『連帯論』

川村邦光の問題提起に答えて

馬淵 浩二

2021年7月に小著『連帯論』⁽¹⁾が上梓された。この『連帯論』に関して、この度、本誌の編集委員である川村邦光さんが書評論文を執筆して下さり、それが本誌に掲載されている。また、川村さんは書評論文に対する応答を著すよう筆者に勧めて下さり、こうしたかたちで小論が掲載されることとなった。このような貴重な機会を与えて下さった川村さんと本誌編集委員会の各位に御礼申し上げる（以下、敬称を略す）。

この小論では、川村の問題提起に対する応答を通じて、『連帯論』の基本的な立場を確認することになるだろう。

さて、『連帯論』は、連帯という現象の理解を深めるために構想された一著である。『連帯論』では、連帯の分類(社会的連帯、政治的連帯、市民的連帯、人間的連帯)、連帯の定義、連帯論の歴史(キリスト教の社会教説や連帯経済を含む)といった視点が設定され、連帯という多面体的現象に対して様々な角度からのアプローチが試みられた。連帯という現象は実に多様であって、社会的連帯、市民的連帯、政治的連帯、宗教的連帯、連帯経済などの領域ごとに様々な表情を見せる。ときに、それらは対立することさえある。たとえば、社会的連帯は社会的統合に貢献するものだが、政治的連

帯は既存の統合関係を告発し修正してゆくものであり、両者のベクトルはある意味で正反対である。このような錯綜した多面性のゆえに、連帯という現象は、それぞれの領域に即して、その固有性において理解される必要がある。『連帯論』がまず目指したのは、それぞれの領域における連帯のかたちを描き出すことであった。それと同時に、そうした多様な連帯が、にもかかわらず連帯と命名される以上、それらには共通の構造がそなわっていると想定することができるはずであって、そうした想定のもとで、連帯の共通の構造を明らかにすることも『連帯論』において試みられたのである。

多様な連帯に共通する構造として見出されたのが、本書が言うところの「人間的連帯」であった。ただし、この場合の人間的連帯は、通常語られる意味での人間的連帯とは異なる。一般に、連帯論において人間的連帯という言葉が用いられる場合、この言葉は人類全体の道徳的な結合を意味する(この意味での人間的連帯には連帯論の内部からも様々な批判が向けられている)。これに対して、『連帯論』が独自の意味で人間的連帯という言葉を用いる場合、それは、人間存在の基本構造としての人間的連帯という意味で用いられている。

こういうことである。人間は身体を持った有限な存在である。そうであるがゆえに、人間は欠如を抱えた非力で脆弱な存在である。なぜなら、人間は自身の生命を再生産するにあたり、食物をはじめとする外部の存在に不可避的に依存しなければならないが、そうした外部の存在をつねに独力で手に入れられるとはかぎらないからである。そのような存在であるかぎり、人間は孤立しては自身の必要を満たすことができない脆弱で非力な存在なのである。しかし、複数の人間が連帯するとき「過剰」が生み出され、その欠如が埋められてゆく。このような「欠如と過剰の弁証法」が人間の生命（の再生産）を可能にする。このような支え合い、分かち合いの構造が、『連帯論』において人間的連帯と呼ばれているものである。したがって、人間が身体をもつ有限的な存在であるかぎり、人間は連帯を必要とする。欠如を抱えた存在であるがゆえに、連帯を必要とし連帯を可能とする存在、それが人間である。『連帯論』が強調したかったのは、このような人間存在の構造としての人間的連帯であった。

川村は、このような『連帯論』のテーゼに対して幾つかの問題を提起している。まず、書評論文の最後から2段落目の部分をやや長くなるが引く。

だが、他方で、戦争を發明して以来、連帯を基盤としつつ、あるいは連帯を内包しつつ、対抗的・競合的・抗争的だとする意見も出てこよう。連帯的・抗争的という二重性こそ、人間の存在様式ではないかと異論もあろう。二項

対立的ではなく、二項が絡み合い、相克してしのぎを削り、それが進展するにともない、「欠如と過剰の弁証法」によって、その相克も大きくなり、非力さの過剰な力は暴力を強化して、抗争的な側面を肥大させ、破壊的な軌跡を辿ってきたといった論が出てくるかもしれない。

この文章の主張は、二段階の構成になっていると思われる。第一に、『連帯論』においては人間存在の対抗的・競合的・抗争的側面が欠落しているという指摘がなされている（論点①）。第二に、連帯は、対抗的・競合的・抗争的側面に絡め取られ、その肥大化や強化に手を貸してしまっているという指摘がなされている（論点②）。

さらに、書評論文の最終段落では、次のような問題が提起されている。

人間の連帯的存在性とは本来的でも本源的でもなく、未決の可能性としてあるのではないか。連帯的な人間の存在様式・構造を裏切るからこそ、分かち合いの倫理を無碍にするからこそ、人間は自分を見つめつつ、連帯・分かち合いの倫理の実践を逆説的にあるいは堂々巡りにせざるをえないとも言えるのだろうか。

この部分が全体として、連帯は本来的、本源的ではなく、むしろ未決の可能性として存在するにすぎないという問題提起（論点③）である。その根拠となる第二文は容易に理解を許さない難解な一文である。しかし、この部分が、人間は本来的に連帯的

であり、その連帯によって各人の生が可能になるという『連帯論』の根本テーゼに対する問題提起であることは明らかである。

また、書評論文の最終部分で、川村は、動物との連帯が将来可能になるのかどうかということを連帯論の課題として提示している（論点④）。以上のような四つの論点について、順に検討することにしたい。

論点①について。論点①は、『連帯論』が対抗的、競合的、抗争的側面への視点を欠落させていると指摘するものである。この指摘自体は、それだけを取り出せば、概ね正しいと言える。『連帯論』の主題は、連帯の構造を記述することである。そうである以上、『連帯論』の焦点はおのずと協働や支え合いや扶助という相に合わせられる。とはいえ、このことは人間存在の抗争的側面を否認することではない。あるいは、「人間は連帯的存在である」と述べることは、「人間は連帯的存在でしかない」と述べることではない。たとえば、「薔薇は赤い」と述べたからといって、そのことは「薔薇に棘はない」ということを含意するわけでない。それと同じように、人間は連帯的存在であると述べる時、人間が抗争的、闘争的存在であることが否定されるわけではない。暴力や闘争という視点を設定すれば、人間はまた別の相貌を示すことになるだろう。

やや唐突であるが、ここで今村仁司の用語法を想起することが役に立つかもしれない。初期の今村仁司は、労働のオントロジーと暴力のオントロジーという問題設定のもとで思考を紡いでいた。前者が展開さ

れた『労働のオントロジー』⁽²⁾においては、人間間のアソシエーションに照明が当てられ、後者が展開された『暴力のオントロジー』⁽³⁾においては暴力や排除に照明が当てられた。このことによって、今村仁司が一貫性を欠いていたとか、矛盾していたということにはならない。なぜなら、アソシエーションも排除も人間存在の様相の一つなのであって、今村が行おうとしたのは、それぞれの視点から人間存在の輪郭を描き出すことだったからである。今村の用語法を転用するなら、私が展開しようとしたのは「連帯のオントロジー」である。しかし、連帯のオントロジーを試みることは、暴力のオントロジーを否定することではない。人間を連帯という視点から考察することは、人間の暴力的側面を否認することでは決してない。

論点②について。論点②は、連帯が人間の暴力的なあり方に絡め取られ、それを増強することに役立っていると指摘している。川村の例示にある通り、暴力の極限である戦争においては、兵士たちは連帯し、敵の生命の破壊を企てる。あるいは、兵士たちは生き延びるためには連帯せざるをえない。そこまで極限的ではないとしても、たとえば、資本制経済においては、労働者たちは、熾烈な競争を勝ち抜くために、みずからは連帯しても、他の企業の労働者に対しては対抗的に振る舞わなければならないという場面もあるだろう。連帯は、このような暴力や抗争や競争においても成立し、そのような場面で成立した連帯は、対抗者たちに対しては開かれず、むしろその

者たちを排除するように働くだらう。一方における連帯が、他方での排除や抑圧に寄与するという川村の指摘は重い。この指摘にどのように応じることができるだろうか。

まず、このような連帯の負の側面に関する思考が『連帯論』に存在しないわけではないと述べておく必要がある。たしかに『連帯論』は抗争や暴力といった事例に言及してはいないけれども、終章では、「悪のための連帯」が可能であることに言及しており、そこでは、連帯が生み出す負の効果について検討している。外部に敵を作り、攻撃するファシストや人種差別主義者の連帯がその代表的な例である。さらに、文脈は異なるものの、第3章の政治的連帯論においては、政治的連帯が対立や闘争を本質とすることにも言及している。

その上で、かりに連帯がそのような負の効果をもつのだとすれば、連帯をどのように評価すべきなのかという問題が残る。この問題に答えるのは難しい。しかし、そうした負の側面があるからといって、連帯の一般的構造に関する『連帯論』の記述が正当性を失うとは思えない。そのような回答を暫定的に示したい。『連帯論』の人間的連帯論が視線を向けているのは、主として人間の生命の再生産である。すでに述べた通り、有限な存在である人間がその生命を再生産するためには、連帯が不可欠である。たしかに連帯は戦争においても発動するだろう。しかし、人間がその生命を紡ぐという基底的な場面において、連帯が必要とされることも事実である。連帯が戦争に

おけるような負の性格を持つことがあるからといって、生命の再生産の場面で働く連帯の構造が無効になるとは言えないはずである。この連帯の構造に関する認識は、自助努力や自己責任を前景化する新自由主義的イデオロギーがなお支配する今日の言説空間にあって固守しなければならない認識であるように思われる。

論点③について。論点③は、連帯が本源的ではなく未決のものだという反論である。この反論にも同意可能な部分がある。『連帯論』は、人間は連帯的存在だということを幾度も強調した。しかし、そのことは、人間が必然的に連帯的に振る舞うということの意味するものではない。誰もが対自的に連帯的存在であるわけではない。さらには、連帯の倫理など不要だと公言するリバタリアン的な立場さえ存在する。そして、『連帯論』全体で繰り返し言及したように、連帯を妨げる様々な環境的要因が存在している。それだから、文字通りの純粋な連帯など現実世界には存在しないだろう。そして、連帯は衰退してさえいる。その意味で、連帯は未決の可能性に留まるという指摘は正しい。しかし、純粋なものではないとしても、自覚的ではないとしても、これまで連帯が人類史において絶えず存在してきたこともまた動かしえない事実ではないだろうか。

連帯がこの世界に現に出来しているのだとしたら、その構造を描くことができなければならない。本書が行おうとしたのは、そのことである。連帯とは何か、なぜ連帯が可能なのか、何が連帯を必然化するのか。

そうした問いを『連帯論』は考えようとした。繰り返すなら、その際に見出されたのが、身体的であるがゆえに有限な存在としての人間が避けがたく内包する欠如性と脆弱性であり、それゆえに必然化する連帯なのであった。人間が欠如存在であるかぎり、他者への扶助、他者による扶助は必然的である。連帯は欠如存在としての人間にとって、その生の可能性の条件である。連帯は、この意味で人間にとって不可避であり本源的なのである。人間の存在構造がこのようなものであるのなら、連帯が本源的であるという主張を取り下げることができない。

もちろん、本書に記した連帯の構造は一種の「理念型」である。それゆえ、そのような連帯を現実世界のうちに見出すことは困難であろう。また、繰り返せば、誰もが常に他者の扶助を必要とするわけではないだろうし、誰もが常に他者への扶助を遂行するわけではないだろう。けれども、人間の存在構造が連帯を要請するという「唯物論的事実」が、そのことによって否定されるわけではない。この唯物論的事実を否定しえない以上、連帯は本源的である。しかし、その必要がつねにすでに理想的に満たされるわけではないという意味では、連帯は未決の可能性でもある。

論点④について。最後に、動物との連帯という論点に触れる。この論点は『連帯論』ではまったく言及されなかったものであり、むしろ川村の指摘によって筆者が気付かされたものである。したがって、この指摘に本格的に応答する用意は小論にはない。ここでは、動物との連帯という論点に

結びつきそうな動向を記すに留める。

一つには筆者の専門である倫理学の内部での新しい動向がある。動物倫理学という分野である。動物倫理学は、どのような動物の扱いが倫理的に正当なものであるかを考え、動物を倫理的配慮の対象として位置づけ直す分野である。倫理学の枠組みのもとにおいてではあるが、動物倫理学は動物との連帯という主題を考えるための重要な道具立てとなるはずである。また、管見に触れたかぎりでは、社会学者の大澤真幸の試みが興味深い。大澤は、宮崎駿の漫画版『風の谷のナウシカ』に定位しつつ、生命同士で生命を共有し、すべての生命がお互いを生かし合う「生命のコミュニズム」⁽⁴⁾の可能性を理論的に模索しているという。これも動物との連帯という論点に繋がる試みであろう。いずれにしても、人間の活動によって引き起こされた地球環境問題の深刻化は、人間のみならず動物の生命をも危機に陥れている。地球環境問題の解決は、人間と動物との関係を連帯的にすることと少なからず結び付いているはずである。川村の指摘は、連帯論の思考をこうした方向に向けて触発するものである。

以上、川村による問題提起に対する私なりの応答を記してきた。もしかしたら、これらの応答は川村の指摘と噛み合っていないかもしれない。その点をあらかじめお詫びしたい。そのような懸念にもかかわらず、小論が『連帯論』の理解に資することになれば幸甚である。

注

(1) 馬淵浩二『連帯論——分かち合いの論理と倫理』(筑

- 摩選書) 筑摩書房、2021年。
- (2) 今村仁司『労働のオントロジー』勁草書房、1981年。
- (3) 今村仁司『暴力のオントロジー』勁草書房、1982年。
- (4) 「ナウシカを母と慕う巨神兵とは何者か? 大澤真幸の自問」、『朝日新聞デジタル』 (<https://digital.asahi.com/articles/ASP3953TTP36UCVL004.html>)。および「人間とは、漫画から考えた 長野の高校、OB大澤真幸さん特別ゼミ」『朝日新聞』2021年12月5日。

(まぶち こうじ 中央学院大学)